

あなたの明日が幸せでありますように

● 目次 ●

— お釈迦さまからのエール

はじめに——「仏さま」と「仏さま」？

1 仏教って何だろう？……………3

2 お釈迦さまのプロフィール……………5

①「お釈迦さま」というお名前……………5 ②誕生……………7

③出家を決意——四門出遊……………8 ④苦行に挑む……………10

⑤静寂な瞑想、そしてさとりへ……………11 ⑥入滅……………12

COLUMN お釈迦さまをたたえる行事……………16

3 「苦」と歩むために……………17

①かたよらない態度——中道……………17 ②真実を見すえる——四諦……………19

③素直に、つつしみ深く——八正道……………20

④かかわりのなかで——縁起……………22

おわりに——仏教って、シンプルで奥深い！

はじめに——「仏さま」と「仏さま」？

お葬儀や法事の席などでよく耳にする「仏さま」という言葉は、きつとどなたにもなじみがあると思います。亡くなった方を偲しのんで、そう呼びしているのです。

一方、お寺のご本尊ほんぞんさまも「仏さま」。浄土宗のお寺であれば阿弥陀あみださまがご本尊であることが多いですが、その阿弥陀さまも「仏さま」ですし、お地蔵じそうさま、観音かんのんさまやお不動ふどうさまも、総じて「仏さま」と呼んでいます。

あれっ、それなら、亡くなった「あの方」と阿弥陀さまは同じということ？
いいえ、そうではありません。

「故人」を「仏さま」と呼ぶのは日本くらいだそうです。今から1500年ほど前、朝鮮半島から仏教が伝わったころの日本では、「八百万やおよろずの神」といわれるように、数多くの神さまがいらっしやるものと考えられており、「仏さまも神さまのひとりだろう」ととらえられていました。また、「人は死後、いず

れは神になる」とも考えられており、この「人は神になる」と「仏さまも、神さまのうちのひとり」との考えが混ざりあい、「故人」を「仏さま」と呼ぶようになった、という説があります。亡くなった方を尊敬し、大切に思う表れともいえ、日本人らしい心の細やかさや大いなるものに対する崇敬すうけいの念が感じられます。

では、本来、仏教でいう「仏さま」とは何でしょう？

そもそも「仏」とは、「さとり」を開いた方のこと。さとりを開いた「仏さま」がお説きになった「教え」、それが「仏教」です。

伝来から長い歳月を経て、日本人の文化や生活のそこそこに溶け込んでいる「仏教」をこの世で最初に説かれた方、スタートさせた方が、「お釈迦さま」にほかなりません。

少しでも仏教を身近に感じていただきたい、いまより少しでも、その教えによってあなたの明日が幸せであってほしい——。

そんな願いをこめ、この小冊子をおおくりします。

1 仏教って何だろう？

さつそく、お釈迦さまという方についてのお話を——の前に、お釈迦さまが説かれた「教え」について、基本的なことを説明しておきましょう。

仏教では、私たちが住むこの世界を「苦しみの世界」と観みます。元気はつらつの青年もやがては老いてゆき、壮健な体といえども病気にむしばまれ、いずれは死を迎える——。これら、誰にとつても願わしくないこと——苦——からは決して逃れることができません。一時的に楽しいことやうれしいことがあっても長続きはせず、悲しいこと、苦しいことが繰り返してやる……。つまり、この世界は私たちの思い通りにはならない、すなわち「苦」、ということなのです。こんなことを言われると余計に苦しくなってしまうようですが、これは誰にも否定できない真理です。

「仏教って、なんて暗くて、後ろ向きなんだろう」ですって!?

いいえ、そんなことはありません。仏教はとつても前向きです。

「世界は苦である」ととらえるのは、「ああ、苦しみからは逃れられないのか、悲しいことばかりが続くのか」と、あなたをふさぎ込ませるためではありません。現実から目をそらさず（これはとても難しく、辛いことですが……）、苦しみを見つめ、その原因をさぐり、苦しみから放たれてほしいからです。

もつとも、「放たれる」といつても、完全に「苦」そのものを取り除こうとすることではありません。残念ながらそれはかないません。どうしても避けられない「苦」とどう生きていくか、悲しみのなかでもくじけずに生きていくにはどうすればよいか、これを考えるのが仏教です。その教えには、「どんなことがあっても、限りある命を、精一杯生きてほしい」——お釈迦さまのそんな願いとエールが込められているのです。

お釈迦さまはこの世の苦しみ、悲しみに対して徹底的に向き合われた方です。そしてその先にある真理——これを「さとり」や「解脱げだつ」と呼んでいます——つまり、苦しみや悲しみのない境地に至ることができたのです。